

【氏名】佐藤 健太郎

【所属大学院】（助成決定時） 東京大学大学院 法学政治学研究科

【研究題目】大正期における中央・地方間関係 ―東北地方を中心に―

【研究の目的】

東北地方を中心に、大正期の中央・地方間関係を政党政治の面から分析するのが本研究の目的である。日露戦後、各地方で政党に対する地域開発の要望が高まり、政党（特に政友会）による地方利益誘導型の政治が展開される過程は、これまで多くの研究が明らかにしてきたことであるが、近年では、地方の具体的な状況を明らかにしながら、利益誘導論にとらわれない中央と地方の関係分析がなされるようになってきた。

しかし、東北地方に関しては経済史的なアプローチからの研究がほとんどであり、政治的な分析はなされてこなかった。他地域の具体的な個別研究でも、東北の存在はある種特殊なものとしてみなされ、東北地方が当時持っていた政治的な位置づけ、役割については言及され得ていないのが現状である。

大正期は、東北というある種の「想像の共同体」が東北振興問題を推し進めようとした時期である。本研究では、東北内部間の協力・対抗関係、内務省および政府の対応を中心に考察し、中央・地方間関係の一端を明らかにする。

【研究の内容・方法】

大正期における各地方（東北地方が中心となる）が、政府に何を期待し、また地元選出の議員に何を求めていたのかを分析するため、さらに各地方が自己の抱える問題をいかに捉え、どう実現していこうと志向していたのかを分析するため、各地域における政治家の活動に注目しながら、新聞・県議会資料、雑誌類を検討し、具体的な問題の所在を明らかにする。新聞資料は、事実関係に注意し、慎重に扱えば有益な資料となろう。そして、他地域の有益な研究成果を踏まえ、比較していく。

まずは、共に有力な政治家であり、内務大臣も務めた原敬、後藤新平を中心に研究し、それと併行して、両者の地元である岩手県、岩手県の隣県であり、政友会勢力が浸透できなかった秋田県の資料を分析していきたい。また、研究の基礎作業として、東北を中心とする代議士のデータベース化を行う。

さらに、当該期の内務大臣及び内務省（地方局）が、地方をいかにとらえ、対応しようとしていたかを分析するため、『原敬日記』など、内務大臣経験者の関係資料および内務省関係資料を分析する。これらの分析は、主に政党政治との関わりを捉えることを主眼とするが、政党に包括されえない官僚勢力の動向にも注視する。客観性・具体性を持った研究とするため、内務省関係者の構想が政策としてどのように表れたかを検討する。そのためには法律・省令レベルでの政策を検討することが必要になろう。

以上のことにより、当時における政官関係、中央・地方間関係、あるいは地方に生きた人々の政治への関わり方を明らかにしていきたい。

【結論・考察】

現状では大正期初期の研究に止まっているため、今後はさらに対象範囲を拡げて研究を継続していきたい。

まず、東北振興論が議会でどのように展開されたかに着目し、明治末においては、政友会代議士・村上先が東北振興論を提議したが、村上は後藤新平系列の人物であり、当時内相だった原はそれゆえ村 upper を警戒していたことを明らかにし、原が当初東北振興運動に否定的であった背景の一つを明らかにした。

また、鉄道をめぐる地方利益の展開過程、特に秋田・岩手間を繋ぐ路線の選定については、党派よりも地域による利害の対立の方が重要であり、同県の政友会内部でも分裂があったこと、原敬がそれに積極的な介入をしなかったことを明らかにした。

そして原敬の主導により明治 40 年に発布された、内務省令第二十六号に着目し、原の地方観、秩序観を明らかにし、利益誘導の観点からは語れない原の側面を示した。なお、まだ不完全ではあるが、東北選出代議士の経歴・選挙記録、伝記などの関係資料録を含むデータベースを構築した。